

# SHOW HEY シネマール

★★★

## 17歳のウィーン フロイト教授人生のレッスン

2018年/オーストリア、ドイツ合作映画  
配給：キノフィルムズ/113分

2020 (令和2) 年8月15日鑑賞

シネ・リープル梅田

Data

監督：ニコラウス・ライトナー

原作：ローベルト・ゼーターラー『キ  
オスク』

出演：ジーモン・モルツェ/ブルー  
ノ・ガンツ/ヨハネス・クリ  
シュ/エマ・ドログノヴァ

### ■ショートコメント■

◆ジークムント・フロイトは、精神分析学の創始者として日本でも有名だが、彼はどこの国の人？また、どの国で活躍したの？そういうことについて、私は全く知らない。他方、第二次世界大戦前夜の1937年のオーストリアが、ナチス・ドイツとの併合に揺れていたことは、私がダントツのベスト1に挙げる映画『サウンド・オブ・ミュージック』（65年）を観れば明らかだ。

本作は、そんな時代状況下、オーストリアの精神科医で、「頭の医者」として知られていたフロイト教授（ブルーノ・ガンツ）と、故郷のアッター湖から母親と別れて一人でウィーンのキオスク（たばこ店）で働くためにやってきた17歳の少年フランツ（ジーモン・モルツェ）との、心の交流を描くもの。

2012年の発行以来、ドイツで50万部を超える売り上げを記録したローベルト・ゼーターラーのベストセラー小説『キオスク』を映画化したものだが、さて、フロイト教授による人生のレッスンとは？

◆「キオスク」と聞けば、日本人ならすぐに新幹線の駅構内にある売店を思い浮かべるが、第一次世界大戦で左足を失ったオットー（ヨハネス・クリシュ）がウィーンで営んでいるキオスクは、タバコを中心とした雑貨店だ。客のニーズがあれば、また、安全だと判断すれば、ポルノ雑誌まで売っているらしい。日本人の感覚では、商売と政治思想は無関係だから、オットーが共産主義者やユダヤ人にタバコを売るのは“カラスの勝手”だと思うのだが、着々と浸透しているヒトラーの圧力の影響を受け、鍵十字を信奉している向かいの店主には、そんな風は無節操な商売を営み、儲けているオットーは許せなかったらしい。

しかし、フランツにとっては、多種多様なお客様から学べることは多い。若くてハンサムな17歳の少年に年頃のおばさんがちょっかいを出しかける風景（？）にはビックリしたが、定期的にタバコを買いに来る上客のフロイト教授からは、無料で夢診断を受ける幸運に恵まれることに。これがいわゆる「頭の病気」の治療だが、思春期の男の子が見るケ

ツタイな夢は、女の子絡みと相場が決まっている。それがわかっている(?)フロイト教授が、「女の子を探して遊んで来い」とハッパをかけたところ……。

◆フランツが心を奪われた女性アネシュカ(エマ・ドログノヴァ)は、友人と共にボヘミアからウィーンにやって来ている女性だが、生きていくのは相当大変らしい。フランツはオットーのおかげで安定的にキオスクの店員として働けているが、ネズミと共に住んでいるらしいアネシュカの収入源は？

また、フランツのおごりでビールを飲み食事をしダンスをすることができたのは双方にとって楽しいことだったが、アネシュカにとってそれが単純に若い男女の恋に発展しなかったのは当然。しかし、フランツの方はそうはいかない。その日以降、每晚のように見るフランツの夢の内容が劇的に変わったのは当然だ。そこである日、矢も楯もたまらず、フロイト教授の夢診断を受けに行くと……。

◆前半のそんな恋物語の展開はそれなりに興味深いですが、本作中盤からは、ナチス・ヒトラーの影響力が強まる中、オットーの店が嫌がらせを受けたうえ、密告によってゲシュタボの手入れは入る姿が登場する。何の容疑で逮捕されるのかよくわからないのは、8月10日に香港国家安全維持法違反で、香港のジャンヌ・ダルクこと周庭が逮捕されたのと同じようなものだが、オットーの場合は、逮捕されたまま一切フランツとの連絡も取れないままだから、もっとひどい。「松葉杖だけでも……」と届けに行ったフランツは、早々に追い返されたうえ、ある日届いた小包にはオットーの遺品が……。

以降、一人ぼっちになったフランツは、これからどうやって生きていくの？また、ナチス・ヒトラーとゲシュタボの影響力が強まる中、フロイト教授は、家族が勧めるように、安全なロンドンに戻る決心をするの？

◆本作は、原題だけでは何の映画かさっぱりわからないが、邦題を読めばまさにその通りの映画であることがよくわかる。あの時代の、あの局面下におけるウィーン。そこにあったオットーの店と、そのお得意様だった上客のフロイト教授。そんな設定の下、たまたまオットーのキオスクの店員として働きながらフロイト教授のレッスンを受けた17歳の少年フランツは、いかに成長していったの？それがよくわかる物語になっている。

だからどう、というものではないが、それなりに納得！

2020(令和2)年8月20日記